

塩川論文「世界認識のために」(「展望」No.29)を読んで

大谷美芳(2023.03.08)



革共同再建協議会はウクライナを反侵略・祖国防衛と支持する主力党派である。その党派の現代世界認識である。強い関心をもって読んだ。

(1)世界戦争の危機はどこから？ ロシアと日本？

そうではなくアメリカと中国

「西のロシアと東の日本が世界危機・世界戦争の点火者」。ロシアができるのは中国を背景に旧ソ連勢力圏の奪還、日本はアメリカ覇権の「突撃隊」。危機はもっと大きい。

アメリカと中国の覇権闘争がある。第三次世界大戦の危機はそこからきている。「策源地」は後発帝国主義の中国である。アメリカの覇権(国家間の軍事的・政治的・経済的・その他の国際的関係の主導と基軸)に挑戦している。

歴史的に比較すれば、かつて、後発帝国主義のドイツがイギリスの覇権(圧倒的な植民地領有)に挑戦して二度の世界大戦を引き起こしたが、中国は現在、その位置にある。また、第二次大戦で覇権はアメリカに移ったが、現在、インドがその位置を狙っている。

「米・中はともに覇権を握れず」。「相手を『競争相手』と規定したり自らも『途上国』と規定するなど、両者ともここでは大国主義や強国意識をむき出しにしていない。」危機感が弱い。対立は激しい。米中覇権闘争が第三次世界大戦に発展する危険性は大きい。

「資本主義の基礎のうえでは、一方における生産力の発展および資本の蓄積と、他方における植民地および金融資本の『勢力範囲』の分割とのあいだの不均衡を除去するのに、戦争以外にどのような手段がありうるだろうか？」(レーニン『帝国主義論』)

正確には、資本主義の土台の上では必然的に第三次大戦に発展する。危機感が弱いのは、中国を、資本主義、それを土台とする帝国主義、と規定できていないからであろう。

(2)中国を資本主義・帝国主義と規定しないと現代世界認識はできない

「…現代中国の体制は『過渡期プロレタリア独裁の歪曲的創成形態』と呼ぶべきである。…資本主義ではありえない。」「歪曲的創成」=哲学ではなく、政治経済学で、生産手段所有制を基本に生産関係を規定すべきである。過渡期という生産関係はない。

中国は、私的資本が独占を含め広範に存在するが、国家資本が統制し支配している。もう見た目すぐ分かる。生産手段の国家所有は実質、官僚の所有である。蓄積と再生産は官僚が支配している。労働者は、そこから排除され、生産手段を独占する国家=官僚に隷属している。まさに資本主義、しかし特殊なそれ、官僚制国家資本主義である。

さらに帝国主義である。レーニンが5つの基本的標識で帝国主義を定義している。①独占、②金融資本、③資本輸出、および④独占資本による世界の経済的分割と⑤帝国主義国家による世界の政治的分割。これに当てはまる。これももう見た目すぐ分かる。

現代は、④と⑤はアメリカが基軸で主導する国際的関係である。それに対して、内部から主導権を握るか、外部に中国主導の新しい関係を構築して拡大するか(「一帯一路」が好例)、いずれ

にせよ中国が挑戦し、覇権闘争になっている。先例がある。ソ連は官僚制国家資本主義の後発帝国主義、米ソ冷戦は米ソ覇権闘争であった(ソ連が敗北・崩壊)。

(3)資本主義・帝国主義と規定できない根拠は「反スターリン主義」

中国を資本主義的帝国主義と規定できないのは、「反スターリン主義」が桎梏になっているのだろう。政治的上部構造・官僚主義の批判に止まり、浅い。もっと深く経済的土台・生産関係の批判に進むべきである。加えて、中国革命の理解が実際と合致していない。

「流民化した農民を軍隊的に組織して革命を遂行」。この革命はブルジョア革命？ 社会主義革命？ 区別できず混同している。「世界史的に見れば帝国主義段階の被抑圧民族と農民はプロレタリアートそのもの」。農民は農業労働者=プロレタリアではない。

中国革命は(ロシア革命も)、ブルジョア革命をプロレタリア階級が主導し、社会主義革命へ発展させようとした。人民民主主義独裁を樹立し(ロシアでは「プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁」=NEPの実質)、工業化と農業集団化(所有制の面で農民をプロレタリアに改造)で、プロレタリア階級独裁へ転化しようとした。

しかし、機械制大工業生産の管理から官僚主義が登場し、官僚制国家資本主義へ転化した。農業集団化は農民の収奪=資本の原始蓄積へ、国家は官僚ブルジョア階級の独裁へ転化した。ブルジョア革命に終わった。中国文化大革命は、労働者が官僚を統制し、やがて官僚に取って代わって大衆的自主的に管理する、こういう階級闘争を組織できず破綻した。

歪曲も何も、そもそもプロレタリア階級独裁は実現されていない。管理の問題、工業化と官僚主義の関係を総括し、生産関係の官僚制国家資本主義を批判するべきである。

(4)ソ連・中国論と民族解放闘争論 そこから現代帝国主義論へ

これが現代世界認識の道筋だろう。世界を変えているのは、後発帝国主義の中国だけではない。アジア・アフリカ・中南米の後発資本主義がもっと大きく変えている。多数の新興国が登場している。「グローバル・サウス」。先発資本主義=「北」に対する「南」の不均衡発展。それを牽引しているのは開発独裁、もう一つの国家資本主義である(植民地独立・民族解放をブルジョア階級が主導し上からのなし崩し的な革命とした結果)。

言い換えれば、一時代前の反米闘争は、民族解放闘争であり、ソ連や中国はそれを支援したが、現在、それが丸ごと、後発の資本主義・帝国主義に転化している。こうして現代は、米欧日と中ロ、両方の帝国主義・覇権主義に反対する闘争の時代である(中ロは「グローバル・サウス」を代表しようとするが帝国主義の本性から必ず対立)。

ウクライナ戦争をめぐる論争は、反米に止まるか、反覇権に進むか、結局は現代世界認識の問題になる。革共同再建協議会の今後の論考を待ちたい。(おわり)